

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.43)

### 「運転に見る俺がルールだの世界」

・・・自動車怖い・・・

メキシコの国土は日本の約5倍以上もあり、公共交通機関の不足とあいまって、完全な車社会であり、特に東京に匹敵する世界でも有数の大都会、メキシコシティの車の数は半端ではない。しかも車優先社会だと思う。現在は車を所有していないので、見た感じだけになってしまうが、当地の自動車運転方法の態様についてレポートし、私説比較文化論を述べたいと思う。



メキシコの主要道路レフォルマ通りの、ある日曜日の通行車両（正面は独立記念塔・エンヘル像）

街中の運転振りを見た限りにおいては、一旦車のハンドルを握ると、日常生活における、悠々迫らぬ生活態度や、時間概念の持ち主とはうって変わり、スピード狂に変身したり、交通道德稀少な運転者に変貌してしまう人が多いようだ。スキーの回転技術のように左右への突然の車線変更、信号無視、一方通行の逆走、無謀な追い抜きなど、何でも有りの世界である。右折あるいは左折する場合に、殆どの車はウインカーを出さない。

ある日配属先近くの路上において、短時間計測してみた。ISOなどを教えていると、証拠主義が頭に残り、ついこのような行動を取ってしまう。一種の職業病か、単なる好奇心旺盛だけなのか？

約50台通過した内、ウインカーを出したのは5台であった。女性とタクシーはほぼ全車出さなかった。このときは、警察のパトカーも出さなかった。ここまで、この流儀が浸透しているとは、立派ですね。(´Q`)

車線を示す白線や信号は目安でしかない。右折、左折車線帯は1本しかないのに、直線走行車線から強行に、2重、3重にかぶせて曲がろうとする車も結構多い。この走り方を、「右(あるいは左)かぶせ強烈走行」と名づけることにしよう。

渋滞でも突っ込んで立ち往生する車、信号が青に変わったとき、少しでも動かないと猛烈なクラクションの炸裂。しかし、車は進まない。やがて信号は赤になり、交差する側の車が走り始め、そちらも流れが阻害される。

まさに混沌・・・Caos である。それでも最後は流れはじめる。何とも摩訶不思議だ。そこには当然人も介在する。人がいるから、車が止まっているから、少しの時間でも空間でも有効利用して、信号待ちの間に商売をする人々がいる。



左かぶせで曲がろうとする車  
・・・新聞記事より加工

例えば、ペットボトルの中の洗剤を、フロントガラスに強引にふりかける窓拭き屋、新聞、タバコ、飲料水、菓子類、テレホンカードなどの売り子たち、その中に混じって、何もせずに単に金をねだる人等。更に、大道芸人たちもいる。顔にペイントし、ピエロの格好をしてボールや棒でのトスジャグリングを見せてたり、中には縫いぐるみの中に入った小さな子どもが、母親の肩に乗って親子タワーを作ったりしている。

彼らの意図を拒否するか、行為者の要求・希望に応じて、何がしかのお金を出すかは、運転者の心積もり

一つ。まさに虚虚実実の駆け引きが日々繰り広げられる。

交差点の渡り方は、ボラッチョ氏にとっては少々難儀である。ここでは、車ではなく、歩行者が巻き込み確認をしなければならないからである。

前方が青になったので、交差点を渡ろうとしても、青になる直前から動き出して、道路を曲がろうとしている車は、殆どと言って良いほど止まってはくれない。そのうち赤になってしまう。

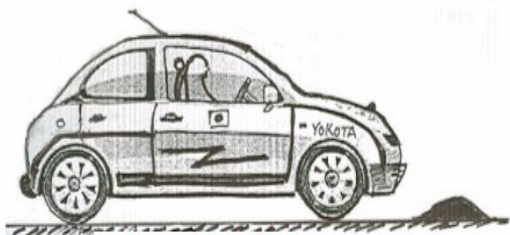
車に巻き込まれても良いように、骨董屋で売っている、中世風の頑丈な鎧でもって体を覆うか？

いや、少しのチャンスを見つけて、遠くから走ってくる車の到達時間を瞬時に予測し、古いぼれボラッチョ氏は、脱兎のごとくと言いたいところだが、ヨタヨタと足がおぼつかないまま、命がけで走るのである。ああ！疲れがどっときた！

老妻にこの話をする、「貴方はもう年だから、完全に渡れるようになるまで待った方がよいのでは」とたしなめられるが、例によって聞いた振りをして、左の耳から入って、右の耳にすぐ抜けてしまい、相変わらず悠長に待っていないで、必死で交差点を渡っている。・・・閑話休題

信号機がない箇所では、こんな設備も見かけるのだ。住宅街や時に市街地の主要道路には、「トペ」と呼ばれる、コンクリートを盛り上げた障害物を見ることがある。それを見落して、減速せずそのまま突っ込むと少なからぬ衝撃とともに、自動車の下腹をこすってしまう。

これはスピードの出し過ぎを、抑制する為に置かれたもの(時には横断歩道の役割?)だが、運転者たちは



ボラッチョ運転はNo!

上: 住宅街に設置されたトペ(Tope)、下: トペのイメージ図

日頃の行動で、自分で自分の首を絞めているようなものだ。

しかし、メキシコ人は実にたくましい。

一見、無秩序に見えるが、法を超越した彼らなりの暗黙のルールは存在し、時と場合により自由に運用する。みんなが状況を把握しているせい、メチャクチャに見える運転マナーも、お互いのドライバーの目を見ながら、前後左右の距離を測りながら、時には窓から手を出して他車を制しながら割り込みするなど、共通の阿吽の呼吸を持っている。

法規は当然存在するも、ハンドルにも「遊び」があるからこそ、車をスムーズにコントロールできるように、車の運転に於いては交通規則よりも、極めて人間的な相互信頼感で、

車の流れをコントロールして、「無秩序の中の秩序」を全うしているのである。

まさに、これらの行為に関連付けて、次の諺が思い起こされる。

「**Allá van leyes, donde quieren reyes**」(アジャ バン レイエス ドンデ キエレン レイエス)と発音し、直訳は王様の望むところに法律ありだが、日本語の諺に相当するのは、無理が通れば道理が引っ込むであろう。しかし、ボラッチョ氏には、今から50年ほど前のプロ野球の試合で、執拗な抗議を受けたとき、「俺がルールブックだ」とはねつけた審判が居たが、この信念ある言葉のほうが頭に思い浮かび、タイトルにその意を汲

### 「ちょっと休憩」(その1)

運転席の女が助手席の男に向かって、息巻いている。  
「この町の歩行者たちの、行儀の悪さたら何よ！貴方、道路を半分占領しているじゃない」  
「君が歩道を走っているのだよ」

んで採用した。

運転方法の違いをレポートしてみたが、悪さ加減を強調したようになってしまったと思うが、日本の過剰とも思える法規制下の運転との比較であって、我々の運転方法と違うからと言って、彼らの運転における諸行動が、文化程度が低いからだろうなどと論破するつもりはない。

赤信号の場合の走行方法など、交通法体系の違いももちろんあるし、そのほかには、彼らの「歴史的なもの」がなせるものではないかと勝手に推察している。「歴史的なもの」とは何だろうか。過去に馬を知らなかった中南米の原住民たちは、スペイン人が持ち込んだ馬を見て恐れおののき、恐怖に駆られたそうである。スペイン人はその彼らを馬のひずめでけ散らかし、火器でもって征服したと言う事実である。

その血気盛んであった、征服者の祖先のDNAを引き継ぎ、馬を車に乗り換えた彼らが、自然な発露として、無意識のうちに行動するのではないかと？さらに、中南米人は規則で縛られるのを好まない傾向があるのも、理由として追加できるのではなからうか。

最後に人間的なものを少しだけ付け加えると、車を所有していることによる“思いあがり”の心があるのと、他人に対する“思いやり”の精神が若干欠けている、文字どおりの「思い」の違いから、来ている方もいるのではなからうか。ボラッチョ氏の雑駁な知識の比較文化論では、こんな程度のことしか浮かばないが、色々な考えが多くの人々の頭の中を駆け巡るだろう。

今日一日も無事過ぎた。「俺がルールブックだ」的運転がまかり通る交通戦争に、今日も負けなかったことを安堵しつつ、次の日の無事を祈りつつ、酔っ払い(ボラッチョ)運転は決してしないとの誓いも新たに、またまたテキーラの杯を重ねるボラッチョ・ボニート氏であった。

(2010年6月28日、明日から今週一杯、ドゥランゴ州の大学での講義活動に入ります)

#### 「ちょっと休憩」(その2)

中南米のとある町で、スピード違反で検問を受けた美人のドライバーが、若い交通警察官に言った。  
「免許証をだせて、おっしゃっても、無理よ」  
「なぜですか？」  
「免許証をとったことがないんですもの」  
「OK。気をつけていきなさい」